

# アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト：第9次調査(2025年)—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院・教授

山田 重郎 筑波大学人文社会系・名誉教授

沼本 宏俊 国士館大学体育学部・教授

サーミー・ジャミール・ハマ＝ラシード クルディスタン地域政府スレイマニヤ古物文化遺産局・職員

ハーシム・ハマ＝アブドゥッラー・アブドゥッラー クルディスタン地域政府スレイマニヤ古物文化遺産局・局長

## Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire: Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, Results of the 2025 Season

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University

YAMADA, Shigeo Professor Emeritus, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

NUMOTO, Hiroto Professor, Faculty of Physical Education, Kokushikan University

HAMA RASHID, Sami Jamil Staff, Slemani Directorate of Antiquities and Heritage, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

ABDULLAH, Hashim Hama Abdullah Director, Slemani Directorate of Antiquities and Heritage, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

西山  
伸一  
山田  
重郎  
ほか

### 1. はじめに

中部大学が中心となっている Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) は、2016 年以來、イラク共和国クルディスタン地域スレイマニヤ (Ku. スレーマニー、Ar. スレイマーニーヤ) 県南部のシャフリゾール平原に位置するヤシン・テペ遺跡とその周辺を対象として考古学調査を実施している。2025 年度は、6 月に起こったイスラエルおよびアメリカによるイランへの電撃的な攻撃、いわゆる「12 日間戦争」の影響で、クルディスタン地域の国際空港は閉鎖され、調査の実施が危ぶまれた。しかし、幸い 8 月には情勢も落ち着き、無事に調査を実施することができた。調査期間は、2025 年 7 月 26 日から 9 月 28 日、および 2026 年 1 月 25 日から 3 月 4 日の期間であった。今回は、発掘調査は行わず、主にこれまでの調査で出土した遺物の整理作業ならびに文化遺産保護事業を実施した。中部大学は、今年度も文化庁より令和 7 年度文化遺産国際協力拠点交流事業を受託し、イラク・クルディスタン地域の文化遺産に関する人材育成・技術移転に関する活動を行った。

さて、今回のフィールド調査の目的は、4 点あった。1 つ目は、過去の調査で出土した鉄器時代を主とする土器整理および土器タイポロジーの確立である。後者

では、各タイプを明確なコンテキストから抽出・記録し、分類した器種毎にタイプを選定した。これまでも出土土器分析のため仮の土器タイポロジーは作成してきたが、今回は、出版に向けた本格的なタイプ・シリーズを確立する目的であった。

2 つ目は、これまで出土した人骨および動物骨の整理である。これも出版を目的としており、これまで一部は取り上げたままになっている人骨や動物骨の整理作業を行った。これにより近い将来、専門家による分析ができる準備が整った。

3 つ目は、文化遺産保護に関する活動である。これは文化庁委託事業の人材育成・技術移転の一環として行われた。内容は、博物館の活性化に関する研修と考古遺跡の保護に関する研修から構成されていた。

4 つ目は、ヤシン・テペ遺跡における盗掘や遺跡の破壊についての調査である。遺跡は、現在、日本調査団とイタリア調査団 (ローマ・ラ・サピエンツァ大学) が発掘を実施している。その影響もあり、盗掘や遺跡の破壊が目立ってきているためである。

### 2. 鉄器時代土器のタイポロジー研究

ヤシン・テペ遺跡において私たちは、2016 年以降、主に鉄器時代の文化層を調査をしてきた。この間、大量の土器が出土し、その都度、時間の許す限り整理作

業を行ってきた。しかし、土器のタイポロジーは仮のものが使用されており、きちんとしたものは確立されていなかった。この度、出版に向けた整理作業に専念できる機会があったことから、タイポロジーの確立を目指すこととした。

西アジアにおける鉄器時代の土器研究は、近年になって一部の地域では盛んになってきているが、30年ほど前までは、イスラエル、トルコなどを除き、鉄器時代の土器はほとんど注目されてこなかった。これは、1つに鉄器時代の歴史研究は、伝統的に文献史学(特に楔形文字文書学)が中心で、考古学による物質文化研究は補助的な役割しかないと考えられていたことによる。ちょうど日本の歴史時代研究における文献史学と考古学の関係を彷彿させる。

このように土器を含む一般の人々が主に使用する遺物は、ほとんど重要視されてこなかったが、1990年代にドイツのハイデルベルグ(1995年)とポーランドのニーボルフ(1997年)で画期的な鉄器時代土器のワークショップが開催された。対象地域は、北メソポタミア、北シリア、および南東アナトリアであった。この成果は、1999年に出版されたが(Hausleiter 1999)、残念ながらその後同様な研究会が開催されることはなかった。

ただ、上述の出版の前後からイスラエル以外の地域における鉄器時代土器研究が散発的に刊行されるようになった。例えば北レヴァント(Lehmann 1996)、シリア(Whincop 2009; Jamieson 2012)、アッシリア・北メソポタミア(Hausleiter 2010; Anastasio 2010)、南東アナトリア(Blaylock 2016)である。しかし、ザグロス山脈とその周辺部では、土器研究はほとんど公表されていない。過去の発掘調査自体が限定的であるということもあるが、鉄器時代を対象とした現在の考古学調査が少ないことも一因である。

ザグロス山脈西部に位置するヤシン・テペ遺跡は、この地域の鉄器時代土器研究に大きく貢献できる成果を上げている。ここでは、アッシリア系の土器は無論のこと、西イラン系、在地系、南メソポタミア系の土器文化を確認することができる。この地域の鉄器時代土器研究は、まだ始まったばかりであり、この遺跡の土器タイポロジーの確立は、将来、この地域の土器研究に大きな寄与をするであろう。

タイポロジー確立のため、これまでの調査で良好なコンテクストを中心に土器タイプを抽出し、実測ならびに図化を行った。基本的な器種としては、Bowl、

Jar、Cooking Pots、Juglet、Middle-sized Storage Jar、Large-sized Storage Jar、Chalice、Gobletなどがあげられる(図1)。胎土は、混和剤として細かなスサ(植物繊維)と鉱物が混在するものが主体で、オレンジ(赤褐色)、バフ(黄褐色)、グリーンバフ(緑黄褐色)、ページュ(薄黄色)が主な色調である(図2)。ペイントは非常に稀であり、あったとしても単色(赤色、茶色)が主である。またアッシリア系土器に見られる多色施釉土器や、いわゆる「パレス・ウェア」(Palace Ware)と呼称される非常に薄い器壁をもち、胎土が緻密な小型土器も出土している。パレス・ウェアには、在地系の模倣品も存在し、その場合は、器壁がより厚みをもち、胎土には混和剤が含まれる。パレス・ウェアは、アッシリアの拠点都市から必ず出土しており、ヤシン・テペがアッシリアの支配下にあったことを明確に示唆する。

### 3. 人骨、および動物骨の基礎的整理作業

ヤシン・テペからは、これまで多くの人骨、および動物骨が出土しているが、その分析はまだ途中の段階

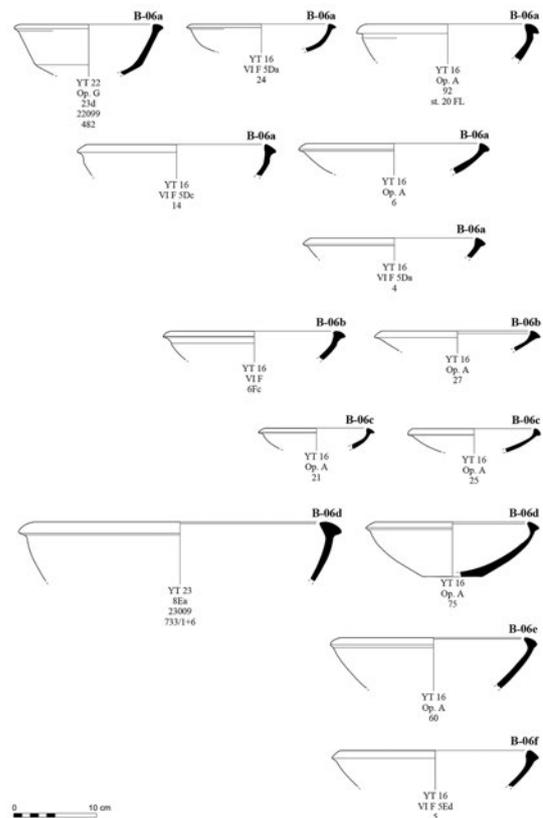


図1 ヤシン・テペ遺跡出土、鉄器時代土器タイポロジーの事例(Bowl器種)。



図2 ヤシン・テベ遺跡出土、鉄器時代土器の胎土・色調の事例。

にある。人骨の整理は特にE地区の集団埋葬、F地区とK地区に広がる墓地から出土したものを対象とした。特にF地区の「子供の墓地」は、北メソポタミアの鉄器時代では事例の少ないものであり、ヤシン・テベの人々の暮らしぶりに興味深い情報をもたらしてくれるだろう。近い将来、形質人類学の専門家による詳細な分析を行う予定である。

動物骨は、各調査区から大量に出土しており、鉄器時代の動物利用に良好な資料を提供してくれる。今回は、特に未整理であった2016～2019年シーズンの動物骨を洗浄し、コンテキスト毎に種の同定のための基礎的な分類に着手した。ヒツジ・ヤギ、ウシ、ブタ、イヌ、ラクダなどを同定したほか、他の動物種の同定も始めた。まだ作業途中であり、将来的には動物骨の同定を含む詳細な分析をコンテキスト毎に実施する予定である。鉄器時代の動物骨研究はまだクルディスタン地域では、非常に限られているため貴重な成果を上げられると思われる。

#### 4. 文化庁委託事業

今年度の文化庁委託事業は、夏季と冬季の2回実施した。夏季は、出土遺構・遺物の記録方法について研修を行った他、出土遺物の保存修復の研修も実施した。また博物館で簡単な展示方法のレクチャーも実施した。研修には古物文化遺産局および博物館の職員が参加した。

冬季は、博物館の展示方法について研修を行うとともに、2024年に実施した地下探査の最終報告書を使

用した地下探査方法のレクチャーを行った。博物館には、過去の委託事業で、日本調査団の展示が行われているが、それを改善する作業、および新たな展示ケースの展示作業を通じて博物館職員の人材育成を行った(図3-5)。このような人材育成が急がれるのには訳がある。2026年度には、外務省の一般文化無償資金協力「スレイマニア博物館における展示、保存及び修復のための機材整備計画」(2025年3月に署名・交換)によって新たな展示ケースや、展示関連資材がスレイマニア博物館に搬入される予定である。これまでスレイマニア博物館の約半分の空間は、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリアなどの資金協力によって改装されてきた。日本の支援により残りの半分の空間が改装される予定であるが人材育成は喫緊の課題である。中部大学はこれまでもスレイマニア博物館に対してガイドブック作成、遺物の展示方法と保存修復などについて支援を行ってきた。今回の文化無償資金協力は、スレイマニア博物館がさらに発展する契機になることを願っている。

#### 5. 遺跡の破壊・盗掘に関する調査

ヤシン・テベ遺跡では、近年、遺跡の破壊や盗掘が頻繁に報告されている。特に2023年にイタリア調査団が遺跡調査に参加して以降、増加傾向にある。遺跡は、車が通れるアスファルト道路から離れた距離(3～4キロメートル)にある。また、アクロポリスは内部が一段低くなっており周囲から見えにくい状態にある。さらに、2つの外国調査団が発掘していることも、周



図3 スレイマニヤ博物館における日本調査団の展示。一部改善している(2025年度冬季)。



図4 スレイマニヤ博物館における展示方法の研修風景(2025年冬季)



図5 スレイマニヤ博物館に完成したヤシン・テベ遺跡の展示(2025年冬季)。展示ケースは古いものを再利用しているが、今後、文化無償による新たな展示ケースが入荷した際には入替予定。

囲の高い関心を集めていると思われる。

アクロポリスは、2016年の発掘前から特にその北部で多数の盗掘坑が存在する。地元の情報によれば、これらの盗掘は、イラン・イラク戦争の時代に盛んに

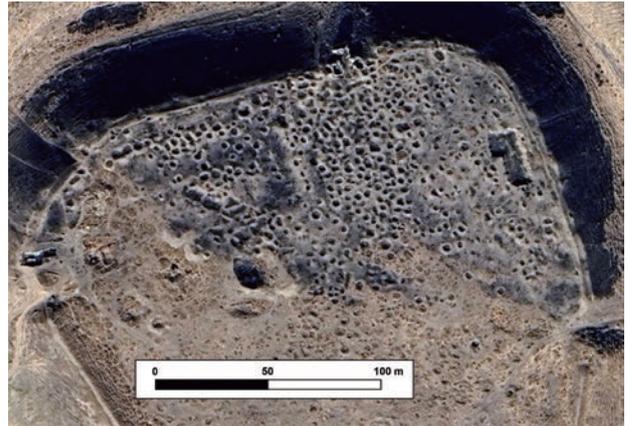


図6 アクロポリスの北部に見える盗掘坑(Google Earthから:2025年11月撮影)。



図7 「下の町」で2025年夏季に発見した新たな盗掘坑。

行われたという(図6)。

2025年度の夏季に遺跡を踏査したところ、これまで盗掘がほとんどなかった「下の町」南東部で盗掘坑が複数確認できた。もっとも深いもので約1.5メートルあった(図7)。さらに「下の町」北東部でも盗掘坑が確認された。これらの盗掘坑は、古物文化遺産局が雇用している遺跡管理人によって埋め戻された。

夏季には、アクロポリスの南東部でこれまで見たこともない大型の盗掘坑が発見された(図8)。深さは、推定だが5メートル近くあった。穴は、垂直のシャフト坑を掘り、さらに水平方向に延びていた。古物文化遺産局にも報告し、対策が検討されているところである。

また2024年度に調査したH地区(ステップトレンチ)でも盗掘坑が見つかった。この部分は、将来的な調査再開を考えて、完全に埋め戻してはなかった。さらなる盗掘を防ぐため、この地区の埋土をさらに積み上げた。2025年度冬季に再度訪れたところ、幸い盗掘は確認されていない。



図8 アクロポリス南東部で2025年夏季に発見した大型の盗掘坑。

イラク・クルディスタンでは、考古学調査が盛んになっている一方で盗掘や遺跡の破壊も急増しており、古物文化遺産総局も大きな課題として認識している。今後とも私たちもその対策に協力してゆく予定である。

## 6. まとめ

ヤシン・テペ遺跡は、2026年で発掘調査の開始から10年を迎える。私たちが調査できた範囲は、40ヘクタールの遺跡やその周辺を含めてごく一部である。それでもこの遺跡が鉄器時代にアッシリアの拠点都市として繁栄した様相が明らかになりつつある。今後も、これまでの成果をとりまとめて刊行してゆくことを継続してゆきたい。また、2018年より開始した文化遺産保護事業もまもなく10年の節目を迎える。現地専門家の方々と対話していると、文化遺産への関心はあるものの、人材や資金の不足、組織の問題や人々の文化遺産に対する意識の課題などが聞こえてくる。これらはもちろん短期的に解決することは難しく、長期的な視点で改善してゆくしかない。遺跡を調査するものとして、今後とも現地への希望をもちつつ、考古学と文化遺産保護の双方に努力を傾けてゆくつもりである。

2025年度の調査は、文化庁委託事業以外において基盤研究(B)「考古学・考古科学分析から構築する北シリア鉄器時代村落生活に関する新歴史像」(代表：津本英利)(課題番号 23K25401)、基盤研究(A)「西アジアの古代文明における薬草利用の解明」(代表：足立拓

朗)(課題番号 24H00098)の支援を受けた。

また、いつものように専門家の方々の協力を深く感謝申し上げます。Jeanine Abdul Massih(レバノン大学教授)、Mouhamad Abdel Sater(フリーランス建造物修復家)、Rola Saade Boghossian(NGO 団体 ADUNA 会長・フリーランス保存修復家)、Rafa Abbass Abdallah(フリーランス考古学者)、Paula Abou Harb(Wormhole Architecture 共同代表・建築デザイナー)、塩崎恭志(塩崎デザイン株式会社)、Rami Yassine(フリーランス考古学デザイナー)。

また、プロジェクトに様々な便宜を図っていただいている Keifi Mustafa Ali クルディスタン地域政府古物文化遺産総局総裁、Nawshirwan Aziz Mohammed 前スレイマニヤ古物文化遺産局発掘調査部長、Saber Ahmad Saber スレイマニヤ古物文化遺産局発掘調査部長、Akam Omar Ahmed Al-Qaradaghi スレイマニヤ博物館保存修復部長、およびスレイマニヤ古物文化遺産局とスレイマニヤ博物館の方々に御礼申し上げます。

## ■参考文献

- ・ Yasin Tepe Archaeological Project (Japan). 2025 Yasin Tepe Archaeological Project (YAP): Field Report of the 2024 Season, Slemani, Iraqi Kurdistan (Submitted to the Slemani Directorate of Antiquities, September 2025).
- ・ Nishiyama, S. and Yamada, S., 2023 Nabû at the Frontiers of the Assyrian Empire: An Inscribed Bronze Necklet from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan, *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie*, 113/2, 250-265.
- ・ 西山伸一・H. ハマー=アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2022 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2021年度の成果—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』43-48頁 日本西アジア考古学会
- ・ 西山伸一・山田重郎・沼本宏俊・S. ジャミール・R. サーレフ・H. ハマー=アブドゥッラー 2023 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第6次調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』113-118頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・山田重郎・沼本宏俊・S. ジャミール・N. N. ハマ=ハサン・H. H. アブドゥッラー 2024 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第7次調査(2023年)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』128-133頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・山田重郎・沼本宏俊・S. ジャミール・H. H. アブドゥッラー 2025 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第8次調査(2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』135-139頁 日本西アジア考古学会。